

表情と行動の不一致課題における推論の個人差についての検討

川 浦 千 明

本研究は、表情と行動に不一致のある人物に対する背景理由の推論と対人恐怖心性―自己愛傾向および共感性との関連について検討することを目的とした。

大学生101名を対象に、表情と行動の不一致課題、対人恐怖心性―自己愛傾向および共感性尺度で構成されたオンライン調査を行った。

表情と行動の不一致課題は、表情画像と行動記述文の組み合わせで作成された。表情画像には、JAFFE (The Japanese Female Facial Expression Database) のある一人物の悲しみ、怒り、喜び表情を用いた。行動の記述文には、神谷 (1997) において感情の分類の一致度が確認された4エピソード (合格Ep, 成績Ep, 修学旅行Ep, 不審者Ep) を用いた。各Epに対応する表情を検討することを目的とした予備調査を行い、その結果4エピソードにおいて参加者全員が対応する表情として回答した表情が一致したことから、合格および成績Epには怒り/悲しみ表情を、修学旅行および不審者Epには喜び表情を不一致表情とした。

対人恐怖心性―自己愛傾向の測定には、清水ら (2006) の対人恐怖心性―自己愛傾向2次元モデル尺度 (短縮版) を用いた。対人恐怖および自己愛得点から性格傾向が5類型 (過敏型, 誇大型, 両向型, 両貧型, 中間型) に分類された。

共感性の測定には、共感性を4因子 (個人的苦痛, 共感的関心, 視点取得, 想像性) で測定する対人反応性尺度 IRI-Jを用いた。

参加者は、表情と行動の不一致刺激 (合格Ep×怒り表情, 合格Ep×悲しみ表情, 成績Ep×怒り表情, 成績Ep×悲しみ表情, 修学旅行Ep×喜び表情, 不審者Ep×喜び表情) に対し「あなたが感じたことや、その背景にあるものとして考えられることを自由に記述してください。」という指示で自由記述することが求められた。表情と行動の不一致課題で回答された自由記述を複数の評定者で、背景理由の記述の次元から (1) 行為者の心的状態についての描写が一切登場しない非推論型, (2) 行為者の心的状態およびそれに準ずる状態についての明記が1つでもある心的状態推論型, (3) 行為者の具体的な背景理由や行動を記述した背景理由推論型の3つに分類し、その回答数と対人恐怖―自己愛傾向および共感性との関連を検討した。その結果、過敏型の背景理由推論型の回答が多い群は共感性尺度得点が高く、誇大型の背景理由推論型の回答が多い群は視点取得得点が高いことが明らかになった。また中間型の背景理由推論型の共感的関心得点が他の類型の共感的関心得点に比べて低かった。これらのことから、対人恐怖心性―自己愛の類型によって他者の背景理由の推論に関連する共感性が異なることが示され、また類型によっては他者の背景理由の推論と共感性得点に関連がないことが示唆された。

表情と行動の不一致のある人物に対する背景状況の推論と共感性および対人恐怖心性―自己愛傾向の各類型の関連について、今後さらなる検討が必要である。